

# Murdoch 研究

—幻想の網の中で—

大野佳代子

## はじめに

Murdoch の小説に対するキー・ワードを考えるとすれば、〈愛〉・〈幻想〉・〈不毛〉・〈錯綜〉<sup>1)</sup>・〈象徴〉・〈観念〉といったようなことを挙げる人が多いであろうと思われる。Murdoch について、哲学的もしくは観念的な性格を、その小説の特徴であるとする指摘は多い。彼女は一時期、実存主義に強い関心を持ち、サルトルにも会い、観念の世界に夢中になったといわれるが、1969年来日の折りのインタビューの中で、サルトルは少し理論的過ぎるため、偉大な作家とは思わないとして、次のように語っている。

One feels there is a background of theory against which these people move, that they are not just being human beings, that they are partly being the puppets of his thought.<sup>2)</sup>そして、このようなことは、作家が同時に哲学者でもある場合は、常に陥りやすい危険な落とし穴だといっているのである。小説家にとって大切なことは、“to create people who are free from his own thought, as it were, and move independently of each other in a free world”<sup>3)</sup>であり、“grasp of the ordinary, accidental middle of nature of human life”<sup>4)</sup>を有することが偉大な作家たるべき資格だ、というのが彼女の考えである。

“good art must come out of unconscious thoughts and feelings to some extent at any rate”<sup>5)</sup>と考える Murdoch は、*Under the Net*

で小説家としてデビューした後、実にさまざまな愛の姿を描いてきた。不倫、ホモ・セクシュアル、近親相姦といった、正常とは言い難い愛が、彼女の作品の世界ではもはや、ごく日常的なむしろ不可避の現象として、登場人物により体験される。それらの愛に苦しみ悩む者、或るいはそれを弄ぶことを快楽とする者などが、まるで手品のように繰り広げられる錯綜した人間関係の中で、描かれていくのである。

I think the novel is such a wonderfully versatile form and a marvellous art form, and really it is a very good form for experimenting in; one can do almost anything with the novel and get away with it.<sup>6)</sup>

本稿では、このように語る Murdoch が試みたであろう、さまざまな〈実験〉が、どのようなものであったのかということ、*Under the Net*、*The Bell* を中心に、考えてみることにしたい。

## I

*Under the Net* は文筆家 Jake Donaghue を語り手とする一人称小説である。フランスから戻ってきた Jake が重い鞆をさげて帰宅途中、友人の Finn から、自分たちが宿なしになったことを知らされるという冒頭のシーンは、Jake がこの先いかに波乱万丈の生活を送るかを、予見させるものとなっている。この時から、Jake (と、Finn) のホームレスの生活が始まるのであるが、この根なし草のような生活に、辛うじ

て根っ子らしきものが芽生えるまでの、三週間足らずの間の Jake の思考と行動が、彼の視点から語られる。

Murdoch は *Under the Net* に先立って発表された『サルトルーロマン的合理主義者』と題する評論の中で、『自由への道』について論じている。彼女はマチウの言動を分析し、次のように言及する。

彼（マチウ）は、彼の過度の明晰さによって麻痺している。…彼が決心し得るためには、彼は〈骨の髄〉まで変わらなければならないであろう。実際、彼は、それ自体について思いめぐらしている空虚な思想なのである。彼のあまりにも合理的な生活の中には、取り消すことのできない決心はどこにもない。〈わたしの行動の結果はわたしから盗み去られている。〉彼が行動するとき、それはハムレットのように、時のはずみで、何ら先立つ理由もなしになされる。…彼はマルセルに、〈ぼくはきみを愛しているんだ〉というために口を開きながら、〈ぼくはきみなんか愛しちゃいない〉という。ピネットに抵抗は無意味だと語りながら、彼は銃を取るのである<sup>7)</sup>。

少々長い引用を取ってしたのは、Murdoch がマチウに見たものと、そっくり同じものを、我々は Jake の中に見出すことができるからだ。“Subtle people, like myself, can see too much ever to give a straight answer.”<sup>8)</sup>と Jake は言い、彼にとっては“Aspects have always been my trouble.”(UN, p.9)であった。彼はマチウと同じように、しばしばきわめて唐突に、思考と矛盾した行動を取り、我々を驚かす。次に引用する(1)は、久し振りに女友達の Madge に会った Jake が、自分に寄せる彼女の真情に心を動かされるが、彼女に対する深い愛情を自覚した途端に、それとは全く矛盾する行動を取る場面である。(2)は、自分が周囲のあらゆるもの——特に人間関係——について、間違った現実認識をしていたことを知った Jake が、Hugo について考え始める場面である。ここで Jake は、冷静に自分の心の内を分析してみせているが、思考を止めた途端に彼は、Hugo の姿を求めて、猛烈な行動を開始するのである。

(1) “… I just want you near me.”

“It’s no use, Madge,” I said, and I stood up. At that moment I loved her deeply. A few minutes later I was going down the stairs.

(UN, p.179)

(2) I began thinking about Hugo. He towered in my mind like a monolith: … Why had I pursued him? He had nothing to tell me. To have seen him was enough. He was a sign, a portent, a miracle. Yet no sooner had I thought this than I began to be curious again about him.

(UN, p.238)

我々の眼前に展開される Jake の動きは、呆れるほど、あわただしい。次から次へと友人を尋ね歩く Jake の姿が描かれるのであるが、宿探しという、彼の最初の目的が達成されることは、遂にない。ひとつのことを完結しないうちに、彼は新たな思いつきを、次々と実行に移していくからである。たとえば Hugo を探しあてるまでの彼の行動、或るいは、Sadie と Sammy の話を偶然盗み聞きし、二人の企みを知った後、Sammy のアパートへ忍び込み、ひょんなことから Mars という老犬を盗み出すくんだり等々、実に思いがけない突飛な行動を、休む間もなく取るのである。Murdoch がマチウを評して言ったように、〈取り消すことのできない決心はどこにもない〉ことを、我々はまさに Jake の言動から知るのである。

これほどまでに、〈行動の人〉として Jake を設定し、思考と行動の分離をしばしば彼に繰り返させた、Murdoch の意図は一体何なのであろうか。

## II

W.V.O’Connor が、“Many of the characters either float through their days, live in dreams, or have their being in relationship to that world of studied unreality, the films.”<sup>9)</sup>と行うように、登場人物たちのボヘミアン性は、全篇を通じて印象的であるが、なかでも Jake のそれは、き

わ立っている。銀行預金が70ポンドだけという経済状態でありながら、Madgeが紹介してくれた、半年で1200ポンドが比較的楽に手に入る、仕事の話をおっさり拒絶してしまう。以下は、申し出を拒絶されたMadgeが、Jakeをなじる部分である。

"I can't do it, Madge," I said.

"You're insane!" said Madge. "Why, Jake, why?"

"I don't know very clearly," I said. "I only know it would be the death of me."

Madge came up to me. Her eyes were as hard as agate. "This is real life, Jake," she said. "You'd better wake up." (UN, p.178)

Jakeは現実と真剣に対峙することを、避けている。彼にとっては"dreamy unlucrative reflection."(UN, p.10)に耽ることが、何よりも楽しいことであり、Madgeのアパートでの居候生活は、"as snug as a pair of walnuts in their shells"(UN, p.10)であった。"I have a complex one (=inner life) and highly differentiated"(UN, p.9)と自負する彼は、自分が何者であるか突き止めようと、努力していると言う。しかし、そのためには現実をよく見、現実の中に飛び込むことこそ、必要であろうことが、彼には分からないのだ。

Jakeのこのような、敢えて現実から眼をそむけ、怠惰と安逸をむさぼる、ぬるま湯に浸っているような、生活態度は、Madgeばかりでなく、Daveからも批判される。彼はJakeに次のように言う。

"I suggest you are a big fool," said Dave.

"Society should take you by the neck and shake you and make you do a sensible job.

Then in your evenings you would have the possibility to write a great book."(UN, p.28)

Jakeの生活態度はいかにも、その時ばかりで気ままである。彼は人生を真剣に考えたりするのは、馬鹿げたことだと思っている。だから、〈現実〉に深入りすることはしないし、他人と深く交わることもしない。以下に示すのが、いふならば生きていく上での彼の信条である。

I hate solitude, but I am afraid of intimacy.

The substance of my life is a private conversation with myself which to turn into a dialogue would be equivalent to self-destruction. The company which I need is the company which a pub or a cafe will provide. I have never wanted a communion of souls. (UN, p.31)

彼の心の中に唯一深く食い込み、しっかりその跡を刻みつけたのは、Hugoである。

Hugoは、"the theme of *Under the Net*"とO'Connorが言う<sup>10</sup>ように、もう一人の重要な人物である。Jakeが一度だけ出版した本 *The Silencer*は、かつて彼とHugoとの間に交わされた会話を、もとにして書かれたものである。作中の、Hugoの代弁者と思われる Annandineのことも含め、Hugoが語る彼の考え方の中で、特に印象的なのは、〈ことば〉についてのものである。以下に、〈ことば〉についての彼の見解を引用してみよう。

(1) There's something fishy about describing people's feelings. All these descriptions are so dramatic.(UN, p.59)

(2) The language just won't let you present it as it really was.(UN, p.59)

(3) All the time when I speak to you, even now, I'm saying not *precisely* what I think, but what will impress you and make you respond... The whole language is a machine for making falsehoods.(UN, p.60)

(4) .when I really speak the truth the words fall from my mouth absolutely dead, and I see complete blankness in the face of the other person.(UN, p.60)

(5) .I suppose *actions* don't lie. (UN, p.74)

ここでHugoが指摘しているのは、〈ことば〉のもつ不確実性・虚偽性ということなのであろう。〈ことば〉には限界があるのであり、真実を伝え得るのは〈行為〉のみである。行為の連続により、確かなものをおのずから浮かびあがらせることによって、本当の意志の疎通は可能になるのである、と彼は言うのだ。更に、そのような〈ことば〉の集合体にほかならない〈理論〉について、Hugoは次のように言及する。

(1) When you've been most warmly involved

in life, when you've most felt yourself to be a man, has a theory ever helped you? (UN, p.80)

(2) All theorizing is flight. We must be ruled by the situation itself and this is unutterably particular. Indeed it is something to which we can never get close enough, however hard we may try as it were to crawl under the net.(UN, pp.80-81)

この中で彼が用いた“**under the net**”がこの小説の表題となっていることを思い合わせれば、Murdoch が〈ことば〉について、更には、その奥に潜む〈思考〉とその結果として現れるはずの〈行動〉とについて、なみなみならぬ関心を寄せていたであろうことは、容易に察せられる。

〈網〉は、ウィトゲンシュタインが『論理哲学論考』の中で使った語に由来するものである、という意味のことを Murdoch 自身が述べたといわれる<sup>11)</sup>。Hugo の言う〈網〉とは観念の網であろう。“I would be at pains to put my universe in order and set it ticking, when suddenly it would burst again into a mess of the same poor pieces”(UN, p.9) と Jake は愚痴をこぼしているが、「異なった網にはそれぞれ世界記述の異なった体系が対応する。<sup>12)</sup>」と、ウィトゲンシュタインが論じているように、自身が織りあげた網の中にいる Jake にとって、世界記述 (= 現実) は、それなりに歪曲されたものでしかなかったのである。

彼が自分の中で勝手にこしらえた網のために、歪曲された現実 (= 幻想) は、いくつもある。たとえば Finn に対する思い違い。“I count Finn as an inhabitant of my universe, and cannot conceive that he has one containing me; and this arrangement seems restful for both of us.” (UN, p.9) だが、現実には、Finn は Jake の思い及ばない、独自の世界を持っていたのである。そのことを知った時、Jake はこう言う。“I felt ashamed, ... of having known so little about Finn, of having conceived things as I pleased and not as they were.” (UN, p.247) 或るいは、Madge に対する無理解。18ヶ月も彼女のアパー

トに居候しながら、Jake は彼女の彼に対する本当の気持ちに、気付かなかった。Jake のこのような誤った現実認識を、もっとも端的に象徴するのは、パリ祭の夜の Anna に関する一件であろう。Jake は花火に浮かれる群衆中に Anna を見出し、一晩中彼女の後を追いかけて回した挙句、人違いであったことを知るのだ。この晩、Jake の眼前に繰り広げられる、打ちあげられては夜空に散る花火、或るいは、澄みきった川面に映し出されては、砕け散る“diabolic Notre-Dame” (UN, p.189) の姿は、彼の幻想とその崩壊を象徴するものであると言える。

〈囚われた状況〉からの脱出 (= 自由) の過程を描くのが、Murdoch の一貫したパターンであることを指摘する声は多いが、〈囚われた状況〉とは、「登場人物が自らの幻想によって認識を妨げられ、金縛りになった状態」、つまり心理的な〈囚われ〉であると考えられる。*Under the Net* で Jake が陥っていたのが、まさにこの状況であった。彼がさまざまな幻想の網の中にいたことは、既述のとおりであるが、本来小説家でありながら、*The Silencer* 以後創作活動が出来ず、翻訳作業に甘んじているのも、もとをたどれば、彼が Hugo に対してもっていた幻想の為である。

Jake は物語の終結部分で、自分がこれまでに Hugo を初め、あらゆる周囲の人間や事物に関して、真実だと認識していたことが、ことごとく幻想であったことを知り、新生への一步を踏み出す。彼の〈新生〉への一步を端的に物語る行為が、Mars 買い取りの決心である。

I wrote the cheque. I reckoned that this left me with just about as much cash to my name as I had had when I left Earls Court Road at the beginning of this story. (UN, p.250)

Mars の為に700ポンドを支払った後には、70ポンドしか手元に残らない。上記の引用文は、一から出直そうという Jake の意気込みを示すものと、考えてよいであろう。

『自由への道』を評した Murdoch 自身のことばを借りれば、*Under the Net* は、Jake が「存在の、自信の、安定した充満性の、追求において、彼の自由を主張したり否定したりするさま

ざまな<sup>13)</sup>」試行錯誤の過程を描いたものであると、言うことができる。「われわれはもはや言語が当然コミュニケーションの媒体であるとは考え得ない。言語の透明性は消え去ったのだ<sup>14)</sup>」と Murdoch は言う。Jake によって繰り返される〈思考と行動の分離〉は、〈言語〉に対する Murdoch のこのような見解を具現するものであり、またそれと同時に、〈現実(人間関係を含む)〉が、如何に偶発的で、複雑なものであるかを、示すものであると考えられる。

### III

Jake はホームレス人間であった。そのことが象徴するように、彼は殆ど一瞬たりとも静止していない。彼は自由に飛びまわっている。彼が囚われた状況にあったのは、あくまでも心理的なのである。*The Bell* では舞台を、尼僧院に隣接した古い宏壮な邸 (Imber Court) とすることにより、Murdoch はこの〈囚われ〉の状況を、心理的ばかりでなく物理的にも一層明白にしている。

Murdoch の描く小説には特定の主人公はいないと、よく言われる。「混沌とした人生および人間関係の現実を把握し、そこに潜む真実を描き出す<sup>15)</sup>」ことを目指す Murdoch であれば、これは当然のことであるかもしれない。たとえば、Jake は語り手ではあるが、決して観察者としての眼と耳を備え、冷徹な知性を持った〈私〉ではない。「ジェイクの性格によって限定された透察力を通じて<sup>16)</sup>」いっさいの出来事が語られるのである。我々は Jake が「線をひき、レットルをはりつけ<sup>17)</sup>」たものを、与えられるというわけだ。彼の〈網〉がかかっている部分と、そうでない部分の混在が、しばしば読者を戸惑わせる。その結果、むしろ独自の見解を力強く展開する Hugo の存在の方が、読者によりアピールすることにもなるのである。

*The Bell* では、*Under the Net* に於けるよりもはるかに多くの登場人物に、我々の心は惹きつけられる。特に印象が鮮やかなのは、Dora・Michael・Toby である。Murdoch はこの三人

を描く時に限り、〈時〉を停滞させたりあと戻りさせたりしている。このことにより、彼らの存在は他の人物たちと比べて、一段と際立ったものとして読者に印象づけられることになる。特に、Michael が Toby にキスをしてしまうという衝撃的な事件の直後を描く、第12章にみられる複雑な〈時〉の展開は、読者を一時的な混乱に陥れ、更にその読者の混乱が、Michael の心の乱れと重複し、そのために彼の煩悶の深さが、より印象づけられるという、効果を生み出している。

Imber Court には、O'Connor が“representing a cross section of English life”<sup>18)</sup>と評するように、種々雑多な人々が集まっている。次の引用の(1)はそこに集まった人々について、(2)はその生活について、その特性を示すものである。

(1) ... a kind of sick people, whose desire for God makes them unsatisfactory citizens of an ordinary life, but whose strength or temperament fails them to surrender the world completely;<sup>19)</sup>

(2) ... for some of such people, “disturbed and hunted by God”, ... who cannot find a work which satisfies them in the ordinary world, a life half retired, and a work made simple and significant by its dedicated setting, is what is needed. (B, p.81)

つまり、俗世間の中でも俗世間から離れても、生きられない人々が、少しでもより満足できる精神生活を求めて集まったのが、“Imber community” (B, p.80) というわけだ。

自給自足による、半聖半俗の信仰生活を目指すと言えば、一種の理想郷のようなイメージが浮かんでこよう。その存在を初めて知った時に、Toby が抱いたイメージがまさに、そうであった。

He was greatly attracted by the idea of living and working, for a while at least, with a group of holy people who had given up the world. The Imber community ,..., worked on the land, running the small market garden which supplied the needs of the Abbey and left some produce over for sale. Something

clean, simple, and vigorous about the whole conception moved Toby very much.(B, p.46)  
Toby の感動は、そのまま我々読者の感動でもある。はたして“Imber community”は、彼のイメージ通りの理想郷なのであろうか。

#### IV

Murdoch は、「小説は本来、分析の、というよりはむしろ、イメージの芸術である。小説が啓示するものは、問題についてよりは、むしろ神秘についてである<sup>20)</sup>」と述べているが、*The Bell*にはさまざまなイメージが登場する。次に示すのは、我々の眼前に初めて姿を現す Imber Court である。

A large house faced them, from a considerable distance away, down an avenue of trees. The avenue was dark, but the house stood beyond it with the declining sun slanting across its front. It was a very pale grey, and with a colourless sky of evening light behind it, it had the washed brilliance of a print. (B, p.27)

まるで絵画のように、視覚に強く訴える描写となっている。特に、正面に夕陽を受けて輝いている邸と、仄暗い闇に沈んだその周辺という、光と影のイメージが鮮烈である。

この光と影というイメージは、この後もしばしば現れるのであるが、それらはいずれも、Imber Court にとっては、よそ者である Dora と Toby によって、我々にもたらされる。

(1) All was rather dark within, . . . There was a stale smell, like the smell of old bread, the smell of an institution.(B, pp.30-31)

(2) The lake too was glowing very slightly, darkened nearby to blackness, yet retaining here and there upon its surface a skin of almost phosphorescent light. (B, p.35)

(3) ...he found it (=the visitor's chapel) now, empty and silent, an awe-inspiring place ... The visitor's chapel ... was rather dark. The nun's chapel, ... was darker still. (B, p.171)

(4) The chant continued until the hideous purity and austerity of the song became intolerable to him.(B, p.175)

(5) Out in the dazzling sunlight he felt unutterably sick and disconsolate. He was conscious of an obscure wish to do something violent.(B, p.175)

(1)と(3)・(4)は、Dora 或るいは Toby を視点とする建物内部の描写である。二人にとってそこは、“a cold familiar inevitability” (B, p.34) を伴った視線に充ちた、しばしば息づまるような恐怖感すら抱かせる所である。(2)(5)はそこから逃れた二人を迎える世界である。(2)では Dora を誘うように微かにきらめく光を発する湖が、そして(5)では目くるめく陽光の中で、“chapel” の呪縛から漸く脱け出そうとしている Toby の姿が、印象に残る。

表題にもなっている〈鐘〉もまた、ひとつの大きなイメージである。〈鐘〉が何を象徴するのかについて、James Gindin は “The bell is a postulant, a means of entering the religious life for each of the people involved.”<sup>(21)</sup>と主張する。“What each person sees in the bell is a reflection of himself and his ideals.”<sup>(22)</sup>と彼が言うように、登場人物たちの〈鐘〉に対する見方はさまざまで、「それぞれの人物の性格を知る上で役に立つ<sup>23)</sup>」ものと考えられる。

この物語には新旧二つの鐘が登場するのであるが、Catherine にとっては恐怖の対象、James にとっては純潔・率直・真実の象徴であった<sup>24)</sup>新鐘は、尼僧院へ移送される途中湖に沈んでしまう。一方、Dora と Toby によって発見された古鐘は、圧倒的な迫力をもって読者の前に姿を現す。

The thunderous noise continued, bellowing out in a voice that had been silent for centuries that some great thing was newly returned to the world.(B, p.268)

これは深夜 Dora によって鳴らされる鐘の描写であるが、この後生じる“Imber community”の崩壊を暗示する文ともなっている。“I am the voice of Love. I am called Gabriel.” (B, p.221) と刻み込まれたこの鐘が轟き渡ったと殆ど同時

刻に、Nick が新聞記者に新旧二つの鐘にまつわる真相を告げ、また Toby は Michael との間に起こった事件を James に告白しているからである。これらのことが致命的となって、“Imber community” が崩壊することを考え合わせると、Gregory が指摘する<sup>25)</sup>ように、〈鐘〉は Imber Court が抱えている幻想性を除き、真実を明らかにすることが、その使命であったと考えることができるであろう。

*The Bell* に表れるさまざまなイメージの中で、殊に印象深いのは〈湖〉に関するものである。きらぎらと光って色がない位明るい湖、鏡のように静かな湖面、深くよどんだ淵、建物や家を映す水面—こういった描写で、折々読者の前に姿を見せる湖は、Gregory が指摘するように、「経験・意識・リアリティとでも言うべきものを暗示している<sup>26)</sup>」と考えられる。Dora や Toby にとって湖は、きらめく陽光に充ち、思いきり自然児として振る舞うことのできる、幸福の象徴のような場所である。一方、溺れて死ぬ夢をしょっちゅう見ると言って、陰気な表情で湖を見る Catherine 。彼女が見る湖は、“obscure and green, ..., full of weeds and floating matter” (B, p.138) である。そして、尼僧達が深夜湖から溺死体を引き上げるといふ、悪夢に幾度もうなされる Michael。彼らの〈湖〉に対する反応には、明らかに恐怖感が根底にある。これは、〈リアリティ〉つまり、〈自分の内に潜む真実〉を直視したくないという、彼らの無意識の自己防御の表れではないだろうか。

Dora と Toby が短期滞在しているだけのよそ者であるのに対し、Catherine 及び Michael は自らの意志と目的をもって、Imber Court で生活している者たちである。二人とも、この“a buffer state between the Abbey and the world” (B, p.81) での生活に、十分な精神的喜びを感じて然るべきである。しかし実際には、先述の〈湖の夢〉が暗示するように、二人の〈無意識〉は必ずしも“Imber community” を肯定してはいない。Dora の眼に初めて映った Catherine は、“disturbing, like a portent, menacing almost” (B, p.31) であり、“There was something timid and withdrawn in her face” (B,

p.38) であるが、その後もしばしば Dora は Catherine に“strange misgiving” (B, p.72) を感じるのである。一方 Michael はとて、朝目覚めて眼に入る Imber Court の風景は、彼にはいつも“derelict and deserted” (B, p.79) と映る。一体、彼らにとって“Imber community” は何なのであろう。殊に Michael は邸の所有者であり、“Imber community” の創設者でもある。彼にとって Imber Court は、最初に Toby が憧れたように、夢と希望に充ちた場所、ではなかったのであろうか。

Michael は生徒を相手に同性愛事件を起こし、教職を退いたという過去を持つ人間である。自分の性癖に人知れず悩む一方で、聖職者になりたいという夢を捨てきれないでいる彼にとって、Imber community 設立は、まさに理想の実現であった。彼がかつての同性愛相手である Nick の入会に敢えて踏みきったのも、Nick との過去を贖いたいと思ったからであり、そうすれば自分も救済されるかもしれないと考えたからである。

彼は Nick とのことは終わったと考えていたが、これが実は自己欺瞞であることに、少しも気付いていない。Nick に出来るだけ会わないようにしようという決心を固めたり、かつて彼を虜にした魅力を今の Nick がもう失っていることにはかなりほっとしたり、ということが何を意味するのか、Michael は自分の真実の姿を認識したがる。彼は〈事実〉から眼をそむけ、〈幻想〉の中に逃避しようとしているのである。

## V

Imber Court は決して、確固たる基盤をもった理想郷なのではない。*The Bell* は26章から成っているが、〈湖〉に関する Michael の悪夢は早くも第6章で呈示されるし、Catherine の反応は第9章で語られる。〈鐘〉は既に第1章でその存在が予告される。Dora が初めて Imber Court へ向かう車中で、耳にするのだ。主として Dora と Toby によって伝えられる、Imber Court 内外の、一切の人・物に関する、さまざま

まな光と影のイメージ、或るいは、湖・蝶<sup>27)</sup>・犬<sup>28)</sup>・鐘といったさまざまな象徴を通して、我々が知るのは、“Imber community”は「幻想の上に立っている不安定な存在である<sup>29)</sup>」ということである。Michaelが初めて、自分の中の真実を認識するのは、Nickの自殺によってである。

(1) Nick had needed love, and he ought to have given him what he had to offer, without fears about its imperfection. If he had had more faith he would have done so, not calculating either Nick's faults or his own. (B, p.307)

(2) Wretchedly Michael forced himself to remember the occasions on which Nick had appealed to him since he came to Imber, and how on every occasion Michael had denied him. Michael had concerned himself with keeping his own hands clean, his own future secure, when instead he should have opened his heart: (B, p.307)

終章の、Michaelの上記の如き悲痛な叫びこそは、Murdochが説く〈愛〉の一つの姿なのではないか。

*The Bell*のテーマについては、さまざまな解釈が可能である。「密室的なあるいは孤立した閉ざされた世界とそこへ侵入してくる外界の住人がひきおこす混乱と緊張、自我や妄執につかれた人々の不毛性、自己発見と現実への目ざめ、自由への希求<sup>30)</sup>」—こういった構成要素から成る*The Bell*は、〈鐘〉を初めとする、作品中に現れる幾つかのエピソードが、何を象徴するかということをも含めて、さまざまな解釈を容認する、奥深さと広がりをも有する小説だからである。*The Bell*は登場人物たちの誰に或るいは何に、視点を置くかによって、幾通りもの読み方が楽しめる小説であると言える。Doraに視点を据えれば、第1章の〈蝶〉のエピソードが象徴するように、そのテーマは〈束縛された愛〉と考えることができる。また、Michaelに視点を置けばそれは、〈宗教的な幻影とその崩壊〉と考えられるであろう。終章では、夫Paulに対する自分の愛が〈幻影〉であったことを漸く自覚し、Paulと別れて自活することを決意する

Doraの姿が描かれる。一方Michaelは自分が、宗教に逃避することによって、自分の本当の心を直視することを避けてきたこと、つまり、彼の〈他者に対する愛〉は、Dora同様、彼の願望が織りあげた〈幻想〉でしかなかったことに気づき、“Imber community”を解散する決意をするのである。つまり、*The Bell*に描かれているのは、〈幻想的な愛とその崩壊〉であったと、言うことができる。

## おわりに

人間関係に非常な興味をもつMurdochは、「小説は人間の状態を描いた絵である<sup>31)</sup>」と考えている。悪と暴力の問題に殊に深い関心を持ち、“I'm interested in the reasons why these things happen.”<sup>32)</sup>と語るMurdochが描くのは、何らかの〈網の中〉にいる人間の姿であり、その相互関係である。我々はMurdochにより、自分たちが〈ことば〉を初めとする実にさまざまな〈幻想〉の中に生きていることを、否応なしに認識させられるのである。



付記：テキストは Penguin Books の *Under the Net* (1984), *The Bell* (1988) を用いた。

[注]

- 1) 例えば、*The Nice and the Good* では、第2章で、ほんの数ページの間に加数名の人間と犬と猫が新たに登場し、その相互関係がてきぱきと紹介される。しかし、このような多数の人物の矢継ぎ早の登場は、その相互関係の錯綜性を一層強めているものと感じられる。
- 2) 島田美代子「An Interview with Iris Murdoch」『英語研究』Vol.58, No.4
- 3)～6) 同上
- 7) Iris Murdoch 著 田中清太郎・中岡洋 訳『サルトルーロマン的合理主義者』p, 41. 国文社。1968.
- 8) Murdoch, *Under the Net*, p. 9. 以下、同書からの引用はすべて文中にて **UN** と略記する。
- 9) W.V.O'Connor, *The New University Wits, and the End of Modernism*. (Southern Illinois University Press, 1963), p, 56.
- 10) *ibid.*, p, 58.
- 11) 野中涼 著『I. マードック』p, 48. 研究社。1971.
- 12) ウィトゲンシュタイン著 奥雅博 訳『ウィトゲンシュタイン全集』p, 185. 大修館書店。1975.
- 13) Murdoch, 『サルトルーロマン的合理主義者』pp, 34-5.
- 14) 同上 p.52.
- 15) I.Murdoch 著 鈴木寧 訳『ブラック・プリンス』解説より、講談社。1976.
- 16) 室谷洋三 著訳『アイリス・マードック』p, 27. 英潮社。1977.
- 17) Murdoch, 『サルトルーロマン的合理主義者』p, 126.
- 18) O'Connor, *op.cit.*, p, 65.
- 19) Murdoch, *The Bell*, p, 81. 以下、同書からの引用はすべて文中にて **B** と略記する。
- 20) Murdoch, 『サルトルーロマン的合理主義者』p, 171.
- 21) James Gindin, *Postwar British Fiction*. (University of California Press, 1963), p, 179.
- 22) *ibid.*, p, 180.
- 23) Gerald T.Gregory, "The Bell". 室谷洋三 著訳『アイリス・マードック』p, 75
- 24) 第9章の講話(p, 135)の中で、James は、これについて言及している。

- 25) Gregory, *op.cit.*, p, 76.
- 26) *ibid.*, p, 68.
- 27) Walter Allen は *The Bell* 第1章の終わりに現れる蝶のエピソードに言及し、いかなる叙述・心理分析よりも雄弁に Dora の置かれた状況を象徴するものであると、絶賛している。 *Tradition and Dream* (Phoenix House, 1964), p, 284.
- 28) James Gindin は、Murdoch がさまざまな動物を象徴として巧みに作品に登場させていることを指摘。特に犬については、*The Bell* ばかりでなく、*Under the Net* 或るいは *The Sandcastle* に於いても、重要な存在であることを主張している。 *Postwar British Fiction*, pp, 182-183.
- 29) Gregory, *op.cit.*, p, 77.
- 30) 蛭川久康 著『マードック』pp, 95-6. 冬樹社。
- 31) Murdoch, 『サルトルーロマン的合理主義者』序文より。
- 32) 島田美代子「An Interview with Iris Murdoch」より。

参考書

- Ronald Hayman, *The Novel Today 1967-1975*. (Longman Group Ltd, 1976)
- 井内雄四郎著『現代イギリス小説序論』南雲堂。昭和59年。
- 井内雄四郎・大社淑子 共著『現代イギリスの女流作家たち』評論社。昭和54年。
- 津田塾大学「文学研究」同人『現代イギリス小説と女性』荒竹出版。昭和60年。
- 島田美代子「マードック文学の特異性」『英語研究』1969年12月号。
- 高松雄一「Iris Murdoch」『英語青年』1962年9月号。
- 蛭川久康「二つの崇高論」『英語青年』1970年10月号。